

The way is open where there is a will

～意志あるところに道は開ける～

キャリア教育部通信 第2号

令和8年5月1日

中学生の皆さんへ

キャリア教育部

新年度が始まって、1ヶ月が経ちます。テストのためではなく、自分のために学ぶことができますか。「学ぶことは心を育てること」です。ネット記事ですが、要約したものを紹介します。学ぶことの本当の意義を忘れないでください。

学ぶとは、心を育てることだった 江戸時代の教えに学ぶ “本当の教育”

(be neutral-blog より)

はじめに 学ぶことの「本当の目的」ってなんだろう？

今の時代、学ぶ理由は「スキルアップのため」「結果を出すため」「いい仕事に就くため」そんな目的で語られることがほとんどかもしれません。けれどふと、こう感じることはありませんか？「**本当の学びって、もっと“人としての在り方”につながるものだったのでは？**」――江戸時代に武士の子どもたちが通っていた学び舎。そこではテストの点数や効率とはまったく別のもっと深い“**学びの意味**”が息づいていたのです。

江戸時代、日本には「心を磨く学び」があった

江戸時代、日本各地に藩が設けていた「藩校」と呼ばれる教育機関では、武士の子どもたちが日々学びを重ねていました。そこで何よりも大切にされていたのは、「**知識よりも心。出世よりも人格。**」剣術や儒教を学びながら、「人としてどう在るべきか」を深く見つめ直す。学びとは、より善く生きる力を育てることであり、心を磨くことこそが教育の中心だったのです。

なぜ人格を磨くことが最優先だったのか？

江戸時代の教育において、学びの最初に教えられていたのは「修身」――つまり自らの心と行いを整えることでした。社会や他人を良くする前に、まず自分自身が整っていなければ何も始まらないという教えです。「**成功のための知識ではなく、調和のための人格**」・・・当時の人々は、学ぶ目的を「知識を得て出世するため」ではなく、「**人格を整えること**で、他者や社会と調和して生きるため」と捉えていました。人格が未熟なまま権力や

武力を手に入れば、やがては人を傷つけ、社会を乱す存在になってしまう——それは現代にも通じる教訓です。学問は「自分のため」ではなく「世のため、人のため」・・・学ぶことは自己満足ではなく、世の中の役に立つためにあるという意識がごく自然に共有されていました。

江戸の学びに宿る5つの本質と今に活かせるヒント

江戸時代の藩校では、「何を学ぶか」よりも「どう学ぶか」「何のために学ぶか」が大切にされていました。そこには、現代の私たちが忘れかけている学びの原点が息づいています。①修身

まず自分の心と行いを整えることから始める

②知行合一 学んだことは“行動”してこそ意味がある

③敬の心 人・自然・学問への敬意を持つ

④志を立てる 「自分は社会にどう役立ちたいか」を見つめる

⑤知より徳 知識よりも、人としての在り方を大切にする

現代の暮らしに取り入れるなら、

*朝5分でも「心を整える時間」をもつ

*学びを1つでも行動に移す

*相手への思いやりを優先する

*学びに「誰かの役に立つ」という視点を添える

おわりに “学び” の意義をもう一度問い直す

江戸時代、藩校で育まれていた学びは、テストの点数や資格とは無縁の「心を育てる教育」でした。「学ぶこと＝より良く生きること」という、まっすぐで、あたたかい思いが流れていました。成果や効率をつい追いかけてしまう現代。けれどどんな時代でも・・・

「学びとは、自分を整え、誰かのために生きる力を育てること」

そんな原点を思い出すことで、学びがもっと喜びに変わるかもしれません。

いかがですか。「皆さんは、なぜ学んでいるのですか。」と聞かれたときに、「学ぶ意義を語れる人」になってください。勉強をするのは、テストのため・入試のためではありません。特に今の社会情勢を見ると、「相手への思いやり」「誰かの役に立つ」という視点が大切ではないでしょうか。

やりたいことを見つけ、なりたい自分になっていくには、学んで心を広げて、いろいろなことに価値を見出し、あれもいい・これもいいと感じることが大切です。日々感じることで心が育ち、人生が豊かになっていきます。